

読書

ユーロに込めた意志

最近、ギリシャの財政問題等をきっかけとして欧州連合(EU)が停滞し、ユーロが崩壊するかもしれないという観測が散見されるが、そのような見方は誤りである。欧州統合は経済的合理性とよりむしろ政治的意志によるプロセスである。

EUのパワーの源泉は経済統合にあるとしても、必ずしも経済の論理で動いているわけではない。この点の理解を欠くとEUという統合事業の本質を見誤ることになる。通貨統合についても同様である。ユーロの父コール元独首相は今年五月、八十歳の誕生日を祝う宴席で「欧州統合はわれわれにとって戦争と平和の問題であり、ユーロは平和を保障するものだ

テーマを
読み解く

EU ①



庄司 克宏

しょうじ・かつひろ
1957年生まれ。慶応大教授・EU法。著書に『欧州連合 統治の論理とゆくえ』『EU法 基礎篇・政策篇』など。

高屋定美著『EU通貨統合とマクロ経済政策』ほか

ということを一層確信している」と語っている。ユーロの誕生で通貨の歴史が変わったと見る嘉治佐保子『国際通貨体制の経済学』(日本経済新聞出版社、品切れ)によれば、欧州は「最適通貨圏」ではないことを既に一九九二年の時点でEUのコミッションが認めていた。米国の経済学者により提唱された「最適通貨圏」理論によれば、為替レートが固定化されても資本や労働が移動すれば域内の景気格差を解消できるとされる。しかし、欧州ではEU法上労働者の自由移動が実現さ

れているにもかかわらず労働移動は必ずしも活発ではない。それでも単一通貨ユーロが導入されたのである。

この点を理解するにはユーロを「政治的通貨」としてとらえる必要がある。田中素香『ユーロ その衝撃とゆくえ』(岩波新書、品切れ)は、独立後の欧州の平和確保やEUの政治統合の未完といった政治要因を抜きにユーロは語れないとする。つまり、EUの政治指導者たちがどのような政治的意志を示し、いかなる解決を図るかを冷静に見守るべきだろう。

他方で「政治的通貨」としてのユーロを管理する立場にある欧州中央銀行は物価安定を主目標として追求し、政治家から独立する義務を課されている。その点は、ユーロのパラドクスともいえる。高屋定美『EU通貨統合とマクロ経済政策』(ミネルヴァ書房)はそのような立場にある欧州中央銀行の金融政策を経済学的に分析している。

EU通貨統合とマクロ経済政策

高屋定美著



ミネルヴァ

読書

統合の正統性を省察

テーマを
読み解く

第二次大戦後の欧州統合の父の一人として数えられるロベール・シューマンが、仏外相としてEUの第一歩となった欧州石炭鉄鋼共同体を提案した際に「それは未知の世界に飛び込むようなものである」と語っている。

欧州統合という事業とは今でも常にそのような性格のものであることを知っておきたい。なぜならば、デレック・ヒーター『統一ヨーロッパへの道』（田中俊郎監訳、岩波書店、品切れ）の冒頭に書かれているように、欧州が事実上統一されたことは一度もないからである。だからこそ、欧州統合とは何かを真に理解するためには歴史をひもとくことが重要となる。同書はEUの思想的背景を知るためにお薦めである。

EU ④

ジャン・モネ『ジャン・モネ 回想録』ほか



庄司 克宏

もう一人の欧州統合の

父と呼ばれ、シューマン提案の発案者であったジャン・モネという人物は、統合プロジェクトの基礎作業において決定的な役割を果たしたにもかかわらず、日本ではあまり知られていないのは非常に残念なことである。彼は欧州統合の歴史の当事者として『ジャン・モネ 回想録』（近藤健彦訳、日本関税協会）の中で、仏独の政治的和解に基づく石炭鉄鋼共同体がどのような苦労の下に合意され設立されたのか等々についてつぶさに述懐している。主権の委譲に

合意するためには国益に縛られた交渉ではなく「共通のプラス」が各国にとつてのプラスなのだという認識が必要であると説いている個所は「東アジア共同体」構想にとつても極めて示唆的である。

他方、第二次大戦後の欧州統合をEUだけの文脈で理解するのは不十分である。遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会）は、政治・経済・軍事・安全保障、規範・社会イメージの三面を踏まえてEU・NA TO・CE（人権等の協力を進めてきた欧州評議会）という大枠の中で戦後の欧州統合の全体像に迫ろうとする力作である。終章で編者は、冷戦の終結とグローバル化の中で統合のロジックが変わり、正統性が揺らぐ中で、EUは自らの形を問い直す作業に直面していると指摘している。

EUの「未知の世界」への旅は続いているのである。

（しよつじ・かつひろ

慶応大教授）



読書

アイデンティティの相克

EUは単一のデモス(国民)ではなく、共生する複数のデモスから成る多元主義的な政体である」と説明されることがある。それを社会的に支えるのは二重のアイデンティティ、すなわち、EU加盟国の国民が国家に対して持つアイデンティティと同時に、EU市民として抱く共通のアイデンティティの共存である。

しかし、EUの基本条約改正を批准するための国民投票で、欧州統合により最も利益を享受してきたフランスやオランダといった加盟国の国民の多数が否決にまわったということを目の当たりにすると、EUに対するアイデンティティはどの程度まで強固なものなのかという疑問がわいてくる。鈴木規子『EU市民



EU ①

福田耕治・福田八寿絵著『EU・国境を越える医療』ほか

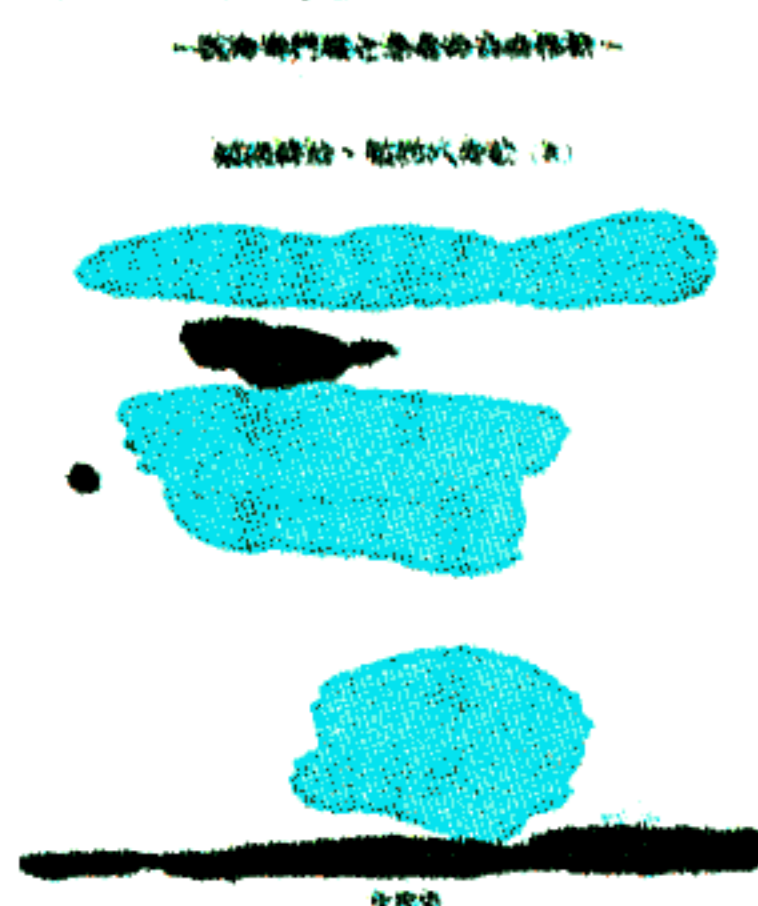


庄司 克宏

権と市民意識の動態』(慶応大学出版会)は、フランスのポルトガル系移民を事例にEU市民としての地方参政権行使に関してアンケートを行っている。在仏ポルトガル国籍の議員の多数が欧州人として投票し、EUアイデンティティが強かったという結果は興味深い。

EU市民には国境を越えた移動と居住の自由がある。これには患者として他の加盟国へ移動して医療サービスを受ける権利も含まれる。たとえば自国で治療を受けるための待機期間が長いような場合、病気の進行や苦痛のために他の加盟国で治療を受けても、治療費の払い戻しを受けること

EU・国境を越える医療



が一定の場合に認められている。国境を越える自由移動はEU市民に保障される一方、治療費等をまかなう社会保障制度は国家ごとに異なる。これは、EUアイデンティティと国家アイデンティティの緊張関係をはらんでいる。福田耕治・福田八寿絵『EU・国境を越える医療』(文眞堂)はそのような斬新なテーマを扱っている。

最後に、欧州統合を理解するためにはEU法の知識が不可欠である。それは加盟国間の平和的な合意が実施されるという保証として、また、EU市民のアイデンティティの源として「力」ではなく「法」が存在するからである。最新の体系書として、岡村堯『新ヨーロッパ法』(三省堂)が出版されている。リスボン条約により改正された基本条約(EU条約およびEU機能条約)も収録されており、非常に便利である。

(しよじ・かつひろ

慶応大教授)